

往生浄土

中央仏教学院講師 内藤知康



「浄土真宗」の「浄土」とは、「往生浄土」を略したものです。法然聖人の『選択集』の冒頭には、「道綽禪師、聖道・浄土の二門を立てて、聖道を捨ててまさしく浄土に帰する文」（『註釈版聖典七祖篇』1183頁）といわれて、以下道綽禪師の『安楽集』が引用されます。その『安楽集』では、「一にはいはく聖道、二にはいはく往生浄土なり」（同頁）といわれていますので、先に「聖道・浄土」といわれているのが、「聖道・往生浄土」の意味であることが分かります。法然聖人はこれによって「浄土宗」の意義を明らかにしてゆかれるのであり、親鸞聖人は『高僧和讃』で、

智慧光のちからより 本師源空あらはれて

浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまふ（『註釈版聖典』595頁）と「浄土真宗」を開かれたのが法然聖人であると讃嘆されますので、「浄土真宗」の「浄土」とは、「往生浄土」を略したものであるのは明らかでしょう。往生浄土とは、読んで字の通り浄土に往生することなのですが、これにはどのような意味があるのでしょうか。

ところで、仏教とは一言でいうと成仏道であるということが出来ます。言い換えれば、迷いの存在である私が悟りの存在である仏に成ることを目指すのが仏教であるということです。日本においてだけでも、様々な宗派の多様な教学があるのですが、それらが仏教ということで一つにまとめられるのは、いずれの教学も成仏道を説いているからなのです。今現在の私が迷いというあり方であり、目指すべきは悟りというあり方であるというのは、天台宗や真言宗であっても、日蓮宗や禅宗であっても、浄土宗や浄土真宗であっても、なんの違ひもありません。それぞれの教学の違いは、どのようにして悟りを目指すのかという点であり、そこに、それぞれの教学の特徴があります。往生浄土というのは、浄土宗・浄土真宗の特徴的な

成仏道であるということが出来ます。

さて、往生浄土とはどのような成仏道であるのかということ、無仏の世における凡夫の成仏道であるということが出来ます。無仏の世というのは、仏のおられない世界という意味です。釈尊はすでにこの世からすがたを隠され、次の仏といわれる弥勒仏はまだ出現しておられません。つまり、現在この世界には仏が不在だということです。釈尊という仏がおられたときには、釈尊の適切な指導を受けつつ成仏道を歩むことができるのですが、仏が不在になってしまいますと、釈尊の遺された教えを手がかりとして成仏道を歩むしかありません。この道は大変困難な道です。そのような困難な道も、能力のすぐれた人々、聖者といわれる人々にとっては克服できる道であるかもしれませんが、凡夫といわれる人々にとっては克服できない道ということになるでしょう。そのような人々に開かれてきた道が、往生浄土の道なのです。そして、親鸞聖人の教えは、この「無仏の世における凡夫の成仏道」を、極限にまでおしすすめた教えであるということが出来ます。それは、以下のご和讃に明らかでしょう。

末法五濁の有情の	行証かなはぬときなれば	
釈迦 <small>ゆいぼう</small> の遺法ことごとく	竜宮 <small>りゅうぐ</small> にいりたまひにき	(同601頁)
『大集経』 <small>だいじつきょう</small> にときたまふ	この世は第五の五百年	
闘堅 <small>とうけん</small> 固なるゆゑに	白法 <small>びやくぼう</small> 隠滞 <small>おんたい</small> したまへり	(同頁)
悪性 <small>あくせい</small> さらにやめがたし	こころは蛇蝎 <small>じやく</small> のごとくなり	
修善 <small>しゆぜん</small> も雑毒 <small>じやくどく</small> なるゆゑに	虚仮 <small>こけ</small> の行とぞなづけたる	(同617頁)
蛇蝎 <small>かんき</small> 奸詐 <small>かんさ</small> のころにて	自力修善 <small>じりきしゆぜん</small> はかなふまじ	
如来の回向 <small>くわうきやう</small> をたのまでは	無慚 <small>むざん</small> 無愧 <small>むき</small> にてはてぞせん	(同618頁)

いずれも『正像末和讃』ですが、「末法五濁の…」と『大集経』に…のご和讃は、釈尊がお隠れになってずっと後の時代(末法・第五の五百年)には、成仏が極端に困難であることがうたわれ、「悪性さらに…」と「蛇蝎奸詐の…」とのご和讃は、成仏道を歩む能力のない存在であると悲しまれています。親鸞聖人にはまた、

正法の時機とおもへども	底下 <small>ていげ</small> の凡愚 <small>ぼんぐ</small> となれる身は	
清浄真実のころなし	発菩提 <small>はつぼだい</small> 心 <small>しん</small> いかがせん	(同603頁)

三恒河沙の諸仏の

出世のみもとにありしとき

大菩提心おこせども

自力かなはで流転せり

(同頁)

とのご和讃がありますが、「正法の時機と…」のご和讃では、正法という釈尊がお隠れになった直後でも成仏道を歩むことが不可能となげかれ、「三恒河沙の…」のご和讃では、仏のみもとに生まれていても不可能であったとなげかれています。結局、親鸞聖人は「無仏の世」ということよりも、「凡夫」ということを強調されたのだということができるといえるでしょう。親鸞聖人は、凡夫ということで成仏道を歩む能力のなさを徹底的に強調されていますが、そのことが阿弥陀仏の本願力による救済の完全性が必要となる根拠だということもできます。

往生浄土とは、浄土への往生なのですが、浄土という世界をどのような世界としてみるかによって、往生浄土の意義も異なってきます。浄土という世界を単に私の心のなかに展開するだけの世界としますと、その浄土へ生まれ往くときを特にこの命が終わるときと限定する必要はありません。しかし、この世界とは別の世界として浄土が位置づけられまると、この世界の命を終えて、他の世界である浄土の命を受けるということになります。つまり、浄土への往生は、この世界の命を終えるときということになります。いつ浄土に往生するのかという点に関しては、様々な議論がありますが、実は浄土をどのような世界として見るのかということが、深く関わっています。

親鸞聖人は、浄土とは悟りのそのものの世界であり、自分自身は迷いの存在そのものと領解され、私たちにもお示しくされます。仏教では迷いと悟りとをどのように考えているのでしょうか。『高僧和讃』(曇鸞讃)には、

無礙光の利益より

威徳広大の信をえて

かならず煩惱のこほりとけ すなはち菩提のみづとなる (同585頁)

とうたわれていますが、ここでは、煩惱が氷にたとえられ、菩提が水にたとえられています。煩惱とは迷いであり、菩提とは悟りですので、結局迷いが氷にたとえられ、悟りが水にたとえられていることとなります。氷と水とは同じものであると同時に違うものです。氷と水とは、どちらもH₂O

であるということでは同じです。氷は固体であり、水は液体であるということでは違います。迷いと悟りとの関係も、実は同じような関係として考えられています。迷いと悟りとは本質的に同じもの(これを迷悟不二といいます)であるので、迷いの存在(=衆生)が悟りの存在(=仏)に成ることが出来ます。キリスト教などのように、神と人間とが全く異質の存在として位置づけられていれば、人間は決して神に成ることはありません。しかし、仏教は私たち人間が仏に成ってゆく教えです。その根拠として、迷いと悟りとは本質的には同一であるということがいわれます。一方、迷いと悟りとが違っているため、迷いの存在である衆生は、悟りの存在である仏に成るために成仏道を歩まなければ成りません。

親鸞聖人には、どこまでも仏に背き続けている私(迷いと悟りとの相反性)というお示しが根本にあるのですが、一方、同じく『高僧和讃』に、

本願門頓一乗は 逆悪摂すと信知して

煩惱・菩提体無二と すみやかにとくさとらしむ (同584頁)

往相の回向ととくことは 弥陀の方便ときいたり

悲願の信行えしむれば 生死すなはち涅槃なり (同頁)

とうたわれ、ここには、「煩惱・菩提体無二」、「生死すなはち涅槃」と、迷いと悟りとの同一性が示されます。迷いと悟りとは同質であるということは、迷いという固定的なものがあるのではなく、悟りという固定的なものがあるのでもないということです。迷・悟という固定的なものがないという立場では、迷いの世界である娑婆世界(=この世界)から悟りの世界である浄土への往生も往生ではない往生であるという言い方もできます。曇鸞大師の『往生論註』では、このような往生が「無生の生」(『註釈版聖典七祖篇』123頁)と表現されています。一方『往生論註』では、「問ひていはく、上に、生は無生なりと知るといふは、まさにこれ上品生のものなるべし。もし下下品の人の、十念に乗じて往生するは、あに実の生を取るにあらざるや」(同125頁)ともいわれています。つまり、迷・悟を固定的なものとして見ないで往生を考えるのは、上品生すなわち仏道を歩む能力の高い人、もしくはすでに高い境地に至っている人であって、仏道を歩む能力が最も低いと位置づけられる下下品の人は、どこまでいっても迷・悟を固

定的なものとしてしか見ることができないといわれています。親鸞聖人は、仏道を歩む能力が低いどころか、仏道を歩む能力が全く無いと私たちを位置づけておられますので、まして迷・悟を固定的なものとしてしか見ていないということになるでしょう。

迷いと悟りとの関係について、迷いと悟りとの同一性、つまり迷悟不二とは、私たちが阿弥陀如来の本願によって浄土に生まれてゆくということ、迷いそのものでしかない私たちが悟りそのものである浄土に生まれてゆくということを根底で支えている大乘仏教の原理なのです。そして、浄土真宗という法義そのものの構造は、迷いと悟りとの相反性を基本的な骨組みにしています。なぜなら、浄土真宗は凡夫の成仏道だからです。先にも述べたように、仏道を歩む能力が全く無い凡夫にとって、迷いと悟りとの同一性はただの理屈でしかありません。たとえていうならば、弥陀の願船は私たちを乗せ、悟りの浄土に運んでゆきます。そのときに、乗せられた私たちにとって、弥陀の願船がどのような原理で私たちを運んでゆくのかということは、主要な問題ではありません。自らの力では決して迷いを出ることのできない私が、阿弥陀仏の弘誓の船に乗せられて悟りの浄土に生まれてゆくことができるということこそが、最も重要なことなのです。私たちは、迷いの存在そのものである私と、悟りの存在そのものである仏とが、不二であるとはとても思えません。阿弥陀仏とは煩惱成就・罪業深重の私たち、暗闇のなかを彷徨^{さまよ}っている私たちを抱き取って、光に満ちあふれた浄土へと連れて行ってくださる、慈愛に満ちた如来さまです。

聖道・浄土の分別をなさった道綽禪師は、往生浄土の法門について、「ただ浄土の一門のみありて、情をもつて^{ねが}^{しゆにゆう}希ひて趣入すべし」(同184頁)とお示しになっておられます。仏教のとらえ方にはいろいろあるでしょうが、往生浄土の法門は、情的な面を主としてとらえるのであるとのご指摘と受け取ることができます。

仏道のなかには厳しい修行に堪えて歩む仏道があります。また、そのような仏道を歩む人々を財政面などで支えることも仏道の一つであると考えられることもできます。平安時代には、比叡山や高野山などで厳しい修行に明け暮れる出家者たちや、仏教教団に多大の財物を寄付することをもって功

徳を積んでいると自負する貴族たちがいました。法然聖人や親鸞聖人が出現されるまでは、厳しい修行もできず、財物をもって仏法に寄与することもできない一般庶民にとっては、歩むべき仏道はなく、置き去りにされていたということもできるでしょう。阿弥陀如来の本願は、生きとし生けるものすべてを救いの対象としています。厳しい修行に堪える強い意志力や体力を持った人たち、多大の寄付を行うことのできる財力を持った人たち、そのような人たちにのみ歩むことが許されている道ではありません。そういう意味では、特別な宗教的感性を持った人たちにのみ歩むことが許された道でもありません。ちょっとしたことで泣き、笑い、怒る、どこにでもいる普通の人たちの歩む仏道が、阿弥陀仏の本願による往生浄土の道です。なお、ここで歩むといっても、自ら一歩ずつ歩むということではなく、阿弥陀仏の本願力に乗せられてゆくということであるのは、いうまでもありません。

浄土というのは、懐かしい世界です。親鸞聖人は関東のご門弟へのお手紙に「かならずかならず一つところへまゐりあふべく候ふ」(『註釈版聖典』770頁)、「浄土にてかならずかならずまゐらせ候ふべし」(同785頁)と述べておられますが、他力のご信心をいただいております。お念仏をよるこぶ人たちは、同じ一つの浄土に生まれるのであるとお示しです。浄土とは、先だってゆかれた懐かしい方々が待っておられる世界です。すでに命終わられた方々の待っておられる世界に生まれてゆくのですから、そこに往生してゆくのは、命終わるときです。また、親鸞聖人が「無量光明土」(同337頁)とお示しのように、浄土とは光に満ちあふれた世界です。私たちは、命終わって暗闇のなかを一人寂しく歩いてゆくではありません。命終われば直ちに、懐かしい方々の待っておられる世界、光に満ちあふれた世界に生まれてゆくのです。また、その世界は浄土という悟りそのものの世界ですから、その世界に生まれるということは仏の悟りを開くということなのです。

いまここで、すでに慈愛の満ちた如来さまの光のなかに撮め取られ、命終われば懐かしい方々の待っておられる光の世界に生まれて仏の悟りを開く、これが浄土真宗という往生浄土なのです。(龍谷大学教授：真宗担当)